

はじめに

我が国の森林・人工林の多くは主伐期を迎えており、森林を積極的に伐採・利用するとともに、森林の若返りを図るため再造林が進められています。近年、九州・四国地域においては再造林面積が増加傾向にあり、全国に先駆けて林業が活発化していることを示しています。一方で、全国的に生息数が増加しているニホンジカ（以下、シカ）による植栽木への被害は深刻化しており、効果的なシカ被害対策が林業における喫緊の課題となっています。シカは九州・四国地域においても著しく増加しており、特に再造林直後の若い植栽木への被害が大きく、壊滅的なダメージを受けている現場もみられます。

一般的なシカ被害対策は、造林地へのシカの侵入を防ぐための防鹿柵の設置です。しかし、柵を一度設置すれば完了するわけではなく、定期的な柵の見回りやメンテナンスが必要であり、上手くいっていない場所も散見されます。設置や維持管理のコスト問題に加え、将来的な柵の撤去も大きな問題として懸念されています。一方、防鹿柵を使わないシカ被害対策も見られるようになりました。単木保護資材は植栽木を1本ずつ筒状の資材で保護する方法であり、大苗植栽はシカの口が届かない高さの大きな苗を植栽する方法です。しかし、効果的な使い方が分からないという声も多く聞きます。持続的な造林・保育作業を行うためには、それぞれのシカ被害対策について整理・検証し、有効な施業技術として確立しておく必要があります。

本冊子は、2017年度から取り組んだ森林総合研究所交付金プロジェクト「九州・四国地域の若齢造林地におけるシカ被害対策の高度化」の研究成果を取りまとめたものです。九州・四国地域をフィールドとして、単木保護資材や大苗植栽の特徴を、防鹿柵との比較を通して明らかにしました。また、それぞれの被害対策はシカの生息状況に大きく影響を受けることから、シカの出現頻度やシカによる被害度を簡易に推測できる方法を開発しました。同時に、シカ被害対策の限界も見えてきました。これらの成果から、シカ生息地で人工林を更新させる初期保育技術として、シカ被害対策を選択するポイントを示すことができました。今後、全国各地で行われるシカ被害対策を検討する際に、これらの研究成果が少しでも参考になれば幸いです。

最後に、本研究の実施に当たり、試験地の設定や調査・データ収集にご協力いただいた九州・四国各県、森林管理局、森林整備センターなどの多くの皆さまに厚くお礼申し上げます。

研究プロジェクト主査

森林総合研究所 九州支所長 陣川雅樹

